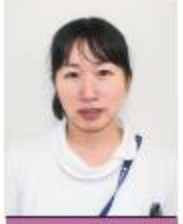
患者さん ひとりひとりに 合ったリハビリを



医療技術部
リハビリテーション部門
言語聴覚士

篠永　晴美
（しのなが はるみ）

脳卒中などにより人や物の名前など言いたい言葉が出ない、違う言葉がでてしまう失語症の方などに対して、言葉のリハビリを行ったり、麻痺によりうまくしゃべることができなくなった患者さんに対して発音の訓練を行うのが言語聴覚士の仕事です。また、食べる訓練（摂食嚥下訓練）も言語聴覚士が行っています。小児の発達や嚥下訓練を行う場合もあります。子どもから大人までどの年代にも幅広く関わります。

篠永さんは、徳島大学病院で様々な診療科の入院患者さんの言葉や食事に対するリハビリを行っていますが、主に脳卒中の患者さんに対するリハビリと高次脳機能障害の患者さんに対するリハビリを、作業療法士や医師など他職種のスタッフと連携をとりながら行っています。

また、病気で声を失った患者さんに対して、代替コミュニケーション手段を紹介し、一緒に練習することもしています。声の代わりとなるコミュニケーション手段としては、人工喉頭や、筆談の道具として電子メモパッド、また、スマートフォンのアプリで文字を入力したら音声が出るものもあり、様々なコミュニケーション手段があるということをできるだけ患者さんに伝えるように心がけています。

言語障害は目でみえない障害のため、混乱し精神的にも不安定になる人もいます。患者さんひとりひとりに合ったリハビリを行うために、患者さんの話を聞きながら、失語症の患者さんなら、その人に合ったコミュニケーション手段を探し、できるだけ早くコミュニケーションを取れるようにすることを心がけています。

リハビリを進めていくうちに患者さんが少しずつ言葉を出せるようになり、ご家族の方と会話ができるようになり喜んでくれたのを見るとこちらもうれしいですし、やりがいを感じます。

「現在も理学療法士、作業療法士、医師、栄養士など他職種のスタッフと連携をとるようにしていますが、今後もさらに連携を密にし、患者さんの希望に応えられるリハビリにつなげていきたいです。」と篠永さんは意気込みを語ってくれました。